オーディオ実験室収載

アナログアキュライザーの展開(11)
－音源比較(11)－

１． 始めに

前報(10)に引き続いて、アナログアキュライザーの効果を受けつつ、フォーマット違いの各種音源を切り替えて比較試聴していきます。

２． アナログアキュライザーの適用と試聴方法

アナログアキュライザーの活用(19)からアナログアキュライザーの活用(21)までの検討結果を要約すると次のようになります。

アナログ音源再生時の適用

ステップアップトランス Stage1030 の入力端子

フォノイコ Brooklyn DAC+の出力端子

fidata 収納および TIDAL における MQA 音源のストリーミング再生時の適用

DA コンバーターBrooklyn DAC+の出力端子

その他のディジタル音源再生時の適用

DA-3000 の入力端子（Ex-Pro の出力後）

DA コンバーターBrooklyn DAC+の出力端子

今回も上記のルートでラフマニノフのパガニーニの主題による狂詩曲作品 43 を聴いていきます。

アナログ

CBS SONY FCCA477

フィリップ・アントルモン(pf)

ユーディン・オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団

BPODCH

2016 年 10 月 15 日収録

ニコライ・ルガンスキー(pf)　トゥガン・ソヒエフ指揮ベルリンフィル

2007年6月17日ヴァルトビューネ・コンサート

スティーヴン・ハフ(pf)　サイモン・ラトル指揮ベルリンフィル

1997年12月31日ジルベスター・コンサート収録

ミハイル・プレトニョフ(pf)　クラウディオ・アバド 指揮ベルリンフィル

BS録画

2019年7月1日放送

ダニール・トリフォノフ(pf)

ワレリーゲルギエフ指揮マリンスキー劇場管弦楽団

3．アナログアキュライザーの試聴結果

アナログのアントルモン盤は、これまでも試聴盤として使用してきまし

たが、温かみのある中にも、切れ味も音の分離も十分で、古い盤ながら、ピアノや木管などの質感も十分で、意外にフレッシュな音も聴かせてくれます。
BPODCH の演奏では、ルガンスキーの演奏が最近のもので、ロシアピアニズムの継承者と言われ、ソヒエフとも相性も良く、現代の演奏では、この曲の極めつけといってもよい演奏です。
スティーヴン・ハフの演奏は、屋外のステージでの演奏で、音質的にはいつものベルリンフィル大ホールのようにはいきません。ハフは初めて聴くピアニストですが、手堅い演奏を披露しています。
プレトニョフの演奏は 20 年以上前のジルベスター・コンサートでの演奏で、アバドも溌溂としており、最近演奏会で聴いたプレトニョフとは違って、若手のホープといった印象で、確かなテクニックの上に丁寧に音を紡いでいます。
トリフォノフの BS 録画では、モスクワのザリャジエコンサートホールのこけら落とし演奏会での演奏です。トリフォノフ一流の鬼気迫る曲芸的な演奏が聴きどころです。ザリャジエコンサートホールもベルリンフィル大ホールと同様、ワインヤードのホールで音も良いのですが、大きさの関係か、少し音の響きが散漫になります。

４．まとめ

ラフマニノフのパガニーニの主題による狂詩曲について、アナログアキュライザーの効果を取り入れた、メディアや再生経路違いの音質や演奏の比較が容易にできるようになりました。

以上